



さくらっ子

No. 14
R3. 12. 3発行
発行責任者
校長 小関 洋

【重点目標】 よさを見つけ 高め合おう

■ 寒い冬を乗り越えよう

先週から、学校の北側の田に霜が降りはじめました。昨日2日の朝、山を見ると白くなっていました。いよいよ冬到来です。樹木は、芽を鱗のように暑い皮や毛で覆います。キャベツや白菜は、糖分を増やし凍らないように身を守ります。昆虫は落ち葉の下に身を隠したり、卵や幼虫、蛹の状態で冬を越します。私たち人間は、こたつやストーブを使用したり、布団もシーツも厚手に替えたりして暖を取ります。体温が下がると、免疫力が下がります。新型コロナやインフルエンザに備えるためにも、暖を確保してこの冬を乗り切りましょう。早速私は極暖タイツをはき始めました。



さて、1年生の 君は、夏休みに初めてカブトムシを飼う中で、いろいろなことを発見し、それを作文にまとめました。その作品が福島県児童作文コンクールで特選を受賞しましたので、みなさんに紹介します。

■ ぼくのカブトムシ 1年

あさおきると、びっくり。ぼくのむしかごのなかに、つのが大きくてカッコいいカブトムシがいた。げんかんでびっくりかえていたのを、おとうさんがつかまえてきてくれた。ぼくは、うれしくてなんかいもむしかごをのぞいた。

ぼくは、はじめてカブトムシをそだてることにした。おばあちゃんといっしょに、えさのゼリーとむしかごにひくマットをじゅんびした。ぼくは、カブトムシをさわったことがなかった。さいしょはドキドキしてこわかったけれど、大きいつものの上にある小さいつものをそおとつまんだら、からだがちあがった。カブトムシはあしをばたばたさせてびっくりしているみたいだった。

おせわをはじめると、いろんなはっけんがあった。1つめは、よるにゼリーをたべること。ひるまは、ほとんどたべない。ぼくはしんぱいで「たくさんたべて、げんきにそだってね。」とカブトムシをゼリーのそばにどうしたけれど、マットのなかにもぐってしまった。それなのに、あさになるとゼリーが1こからっぽになっている。カブトムシはよるにおなかをすくみたいだ。

2つめは、からだにみずをかけてあげるとげんきになること。あついひには、ときどきスプレーでみずをかけた。あしをうごかしてすこしずつうごいた。ぼくもシャワーはきもちがいいからおなじかなあとおもった。

3つめは、よるになるとげんきにうごくこと。ぼくがおきているときはマットのなかでじっとしていてねている

みたいだ。ねるまえに、きになってむしかごをのぞいた。すると、小さいくちをもぐもぐしてゼリーをおいそうにたべていたのでおどろいた。森のなかにいたら、木のしるをのんで、とびまわっているのかな。クワガタやほかのカブトムシとたたかっているのかな。森にいるカブトムシも見てみたいなおもった。

なつやすみがあとすこしでおわるころ、むしかごをのぞいたら、カブトムシがびっくりかえってうごかなくなっていた。いつかはしんでしまうとわかっていただけれど、かなしくてなみだがぼろぼろでてきた。にわにおはかをつくって、すきだったゼリーのかたちに、にているいしをみつけてうえにのせた。「ぼくのうちにきてくれてありがとう。うれしかったよ。」とこころのなかでおれいをいった。ぼくのきもちがどうかとどきますようにとおねがいをした。

ことしのなつやすみは、カブトムシといっしょでとてもたのしかった。そだてるのはむずかしかったけれど、さわってなかよくなれた。ちかくで見ると、しらないことがたくさん見つかった。ひみつを見つけたら、もっともつとカブトムシのことをしりたくなった。おわかれするのはとてもつらかったけれど、たいせつにするとそういうきもちになることもわかった。おしえてくれてありがとう、ぼくのカブトムシ。



■ 入賞おめでとうございます。

【福島県児童作文コンクール】

【相馬地方児童作文コンクール】

【特選】

1年 [ぼくのカブトムシ]

【佳作】

5年 [ただいまと言える幸せ]

6年 [変わらないもの]

【入選】

1年 [はがぬけちゃった]

2年 [おさらあらいとおさらふきのわたしのせつ明書]

4年 [ぼくはあきらめない]

4年 [強い心]

5年 [相馬ぼんうたを歌うぼく]

5年 [わたしの町の「相馬野馬追」]